28年 8 月 8 日

会 派 名　　明るい未来を創る会

代表者名　　合川　哲夫 ㊞

会派の（　調査　・研修）

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1 調査研究または研修実施日	平成 28 年7月3日（日）　～ 平成28年 7月 5日 （火）　2泊3日	
2 調査研究または研修場所	7月3日	移動日
	7月4日	島根県隠岐郡海士町　交流促進課
	同　日	同上　　西ノ島町「隠岐島前病院」
	7月5日	鳥取県境港市
3 調査研究事項または研修名	海士町	定住対策と自立促進プラン
	隠岐島前病院	病院経営と総合医療と 地域医療と包括ケアシステムの構築
	境港市	「伯州綿」の商品開発と付加価値商品
4 参加者指名（4名）	・清水　晃	
	・中村　のりひと	
	・野村　正夫	
	・合川　哲夫	
5 調査研究または研修の概要及び感想」	別紙のとおり	

受付 号
28.8.-8
おき島議会

海士町視察研修

概要

海士町とは島根県隠岐郡、いわゆる隠岐諸島の一つ中の島を海士町と呼ぶ、諸島は北に位置する隠岐島を隠岐の島町と称し道後という、それに対し南に西ノ島は西ノ島町、中ノ島は海士町知夫里島は知夫村と称しこの３島をまとめて島前と呼び、地元では大きく分けている、この３町１村で隠岐郡を形成している。

人　口　平成２２年度　２３７４人

面　積　３３．５平方キロ

黒潮の対馬暖流の影響を受け、漁業、農業も盛んである。今回の視察では、この島前に位置する海士町（中ノ島）を視察した。

視察目的

定住対策と自立促進プラン

視察日時

平成２８年７月４日　午前　９時３０分～１１時３０分

視察研修風景７月４日

１．定住化策

昭和 25 年頃は約 7,000 人近くいた人口も平成 22 年日は 2300 人と高齢化率 39%と、高い数値、著しい人口減少が進んだ。

国の経済対策による公共事業への投資で社会資本は（離島振興法等）で整備された。半面町の借金（地方債）が膨らみ、公共事業で生かされてきた島の証であった。

平成 14 年の町長選で、地縁、血縁を否定した町民と意識改革した職員が、年功序列を廃止し、適材適所、現場主義に再編し、職員が地域を変える意識が生まれた。

平成の大合併時に、その話が持ち上がったがメリットが活かされないため、各町村それぞれを歩むこととなった。

三位一体の改革により、地方交付税の大幅な減少により、平成 20 年には財政再建団体へと転落の危機が予測され、町民、議会、行政が一体となり島の生き残りをかけた。「海士町自立促進プラン」が平成 16 年度に策定された。

※生きるための守りの戦略

まず徹底した財政改革、給与カット町長他三役 50～40%、職員 30～16%、議員、教育委員 40%等断行し、町職員がそんな状況なら町民の各団体からも補助金返上が相次ぎ、老人のバス運賃の優待措置中止までも申し出てくれ、町長は感極まったとのお話がありました。

※生き残りを懸けた攻めの戦略

攻めとは一次産業の再生で島に産業を創り、人（雇用の場）を増やし、外貨を獲得して活性化を図り成長を島の外に求めるとし、現場第一主義で,実行部隊となる、交流促進課、地産地商課（あえて商の字を使用）、産業創出課の３課を創り、町の玄関である菱浦港のターミナル「キンニャモニャセンター」に地産地商課と産業創出課を統合し同センターに置き、常に現場にあるということである。

・地域再生戦略～島丸ごとブランド化で地産地商へ

自然環境を生かした第１次産業の再生で先駆的に取り組み、高い厳しいハードルが求められる東京にみとめられればとの考えから、メインターゲットを最初から東京に置いた。

・さざえカレー、海士いわがき生産、ＣＡＳを導入し「白いか」の瞬間冷凍の出荷、「ナマコの干物」「潮風ファームの隠岐牛」これなどは東京で高い評価を得て月に 12 頭から 24 頭まで出荷できるようになった。 そのほかにも観光、リネン、メディア事業、学習塾等々 12 の

法人経営が生まれそのほとんどがＩターン移住者、島の人たちと連携を図り雇用を生み出し、所得向上にも貢献している。 職員の給料も少しずつではあるが改善されてきている。

・未来を支える人づくり

持続可能な地域社会を創る力「人間力」「人間力あふれる海士人」の育成を目指す「人間力推進プロジェクト」を立ち上げ地産智生（造語）の人づくりに取り組む。

こうして、よそ者、若者が集まり、定住と自立が生まれてきた。

感想

本土からフェリーで３時間弱この離島に全国から若者が集まり、それぞれの分野で活躍し採算性を確保し、町の自立が生まれ、人口が増えてきたことの驚き、なぜこうなったかは町長の破天荒と言っていいくらい、自身は当然、職員を含めた給料カット、町民も同調し協力をしてくれた、この町を何とかよみがえらせようと一丸となったことが大きな推進力となったことは間違いない。

今後、前述のこれら事業を持続可能なものにしていくことが大事なことと思う。中高生を対象に「人間力あふれる海士人」が次世代を担う若者の育成が大きなポイントになると感じた。

隠岐広域連合立「隠岐島前（どうぜん）病院視察

概　要

隠岐の島は、島前地区（人口６,１１７人）と島後（どうご）地区（人口１４,７５９人）から成り立ち、隠岐島前病院は島前地区（西ノ島＝西ノ島町３,１６１人）、中ノ島（海士町２,３５０人）知夫里島（知夫村６０６人）の３島を担当している広域連合病院である。
島前地区の３島（２町１村）には診療所はあるが開業医はいないため、３島の中核医療機関として昭和５７年に島前町村組合立島前診療所が設立され平成１３年に当該診療所を増改築して４４床の入院可能な隠岐島前病院となり地域の医療に貢献しています。

※隠岐島前病院の概要

・院長－白石吉彦（第２回日本医師会赤ひげ大賞受賞）
・建物－鉄筋コンクリート造３階建て、３,４４２㎡
・病床－４４床（一般６室-２０床・療養型６室-２４床）
・科目－内科、外科、小児科、眼科、耳鼻科、精神科、産婦人科、整形外科。
・職員－医師６名、看護師３３名、看護女子８名、薬剤師１名、作業療法士３名、科学療法士４名、臨床検査技師１名、管理栄養士２名、医師作業補助員３名、調理員８名、事務員１４名、警備員３名
・機器－ヘリカルＣＴスキャン、超音波診断装置、内視鏡（胃、十二指腸、大腸、）レントゲン、手術機器具、生化学分析装置、人口呼吸器、電子カルテ、監視用モニター、遠隔画像診断システム、ＰＡＣＳ。
・患者－外来１２０．９人／日、入院３８．７人／日（病床利用率：８８．９％）

※感想

小さい島の小さな病院｛めざせ！日本一の地域医療｝、を合言葉に医師、看護師をはじめ、全職員に島民の健康と命を守る気迫が感じられ、全面的に島民の信頼を得てスタッフのモチベーションをさらに高めながら地域医療にかかわる姿勢に感動しました。

院長の白石吉彦医師は自治医科大学の出身で、平成２５年に日本医師会の「赤ひげ大賞」を受賞し、地域医療の神髄に挑む姿勢を島民に評価されている、内容の一つに「隠岐島前病院は島前地域で暮らす人々の唯一の砦である、退院後に適切に在宅や施設での療養に繋がらなければ、患者はまた急性期に戻ってしまう、ここでは退院してからが始まりで、いかに患者さんをもとの生活にソフトランディングさせるかに心を砕かないと、結局この病院に戻ってきてしまう、退院しても寝たきりにならないように地域包括ケアを意識して医療にあたるのが当然で、病院という施設の医療だけで患者は幸せにはならないことが目に見える、という先生の言葉から「地域家庭医」の位置づけが理解できた。

視察研修後、白石院長を囲み記念撮影

境港市伯州綿視察研修

概　要
人 口　　３５,２５９人平成２２年度
面　積　　２９．０２平方キロ

日本海側の有数な漁港の中でトップクラスの漁港として栄え、漫画家水木しげるの故郷で知られ作品のキャラクターの彫刻を配置し、水木しげるロードと称した観光用メーンストリートに仕立て上げ、賑わいを見せている。最近では国の観光客誘致により当市にも大型クルーズ船が寄港し、昨年は４０回も入港し、中には１６万トンもの超大型クルーズ船が寄港するようになり商業港としての色合いも見せている。

今回の視察は江戸時代前期より続く「伯州綿の商品開発と付加価値商品」の研修を行った。

※伯州綿の概要

３００年以上前この伯耆の国（鳥取県西部、島根県西部地方）いわゆる伯州綿として栽培されていた。北前船により全国に送り出しブランド化していき、鳥取県の経済を支えていた。

明治２９年（１８９６年）関税撤廃により安価な外国産が台頭し次第に国産綿は衰退していったが、「弓浜絣」の原料として細々と、地域で栽培は続けられていった。

こうして市内、弓浜半島で栽培されていた在来種の和綿を復活させるため、平成２０年耕作放棄地（５００㎡）を利用して、境港市農業公社が「伯州綿」の栽培を始め、翌年平成２１年には栽培面積を１０,０００㎡に拡げ本格的に取り組みを開始し、現在では２０,０００㎡となった。科学肥料は使わず有機農業に徹し、良質な綿が栽培されるようになった。

※栽培体制

栽培管理が楽であり、肥料は少々で済み、肥料代もいらず、軽量作物で高齢者向けであるが農家への奨励は販路が不透明であり、農家向けには奨励は困難であるため、市では平成２２年に「伯州綿栽培講座」を開始し人材発掘し、２３年には「栽培サポーター制度」を導入し、子供たちの体験学習で栽培、グループ、家庭栽培等市民に広く呼びかけ、収穫した綿の買い取り制度を確立し、現在１kg 当たり１,５００円で購入している。

※商品と加工販売および感想

こうして生産された面は、新生児誕生の際には市からのお祝い品として「おくるみ」を、百歳のお年寄りには「ひざかけ」を贈呈し好評を得ている。

しかし商品化に向けての、栽培管理とその方法に難しい面もある、また短繊維のため加工にも課題が多く、市場性には難点が多いが良質な、オーガニックコットンを目指し高い視点での取り組み、ブランド化、高級品としての目標に向かっていけば可能性は生まれてくると感じた。

マグロ豊漁時にはマグロのぼりが揚がる